

# 「脊髄係留」様々な兆候

福岡市立こども病院の専門医が子どもに注意が必要な病気などを解説する「#子育て処方せん」。

今回は、通常は背骨（脊椎）の中を走る脊髄に影響し、成長とともに様々な症状を引き起こすことがある「二分脊椎」について、脳神経外科の黒木愛医師に聞いた。

## 二分脊椎

脊髄は脳から腰まで続く神経の束で、脳と全身をつなぐ重要な役割を持つ。通常は脊椎の中で守られているが、脊椎が開いたまま生まれてくることもあり、これを「二分脊椎」と呼ぶ。

骨が開いているだけであれば問題はない。ただ、開いている部位で、脊髄が外に出て周囲とくっついていたり、外の組織が入り込んで脊髄とつながったりする「係留」が起こると、成長に伴い脊髄が引っ張られ、排尿や排便のトラブル、足の動きや感覚の障害などが生じうる。

この「脊髄係留病変」には様々なタイプがあり、妊娠中の超音波検査で見つかるものもあれば、背中やお尻に見られる「サイン」から分かるものもある。サインは、▽お尻の皮膚の膨らみ▽お尻の割れ目のゆがみ▽くぼみ▽束になって生えた毛▽赤いあざ——など

だ。

当院ではこうしたサインがあれば、まずは超音波検査

查を行う。生後早い時期ほど見つけやすいが、3か月を超えると脊椎の成長などでほとんど見えなくなる。サインがあっても病変が



黒木愛医師

## 生後 背中やお尻に

ないことが多いが、過度の心配は要らないが、できるだけ早めにかかりつけ医に相談することが重要だ。

脊髄係留病変と診断された場合、多くは係留を解く手術が必要になる。手術をしても成長とともに再び脊髄と他の組織が係留することもあるため、定期的に症状の変化を確認し、必要に応じて磁気共鳴画像（MRI）検査も行っている。（聞き手・大森祐輔）



専用のクラウドサービス上の地図に、通学路の危険箇所を登録する生徒たち（10月8日、山口県上関町の町立上関中で）＝山口県教委提供

## 児童の登下校 見守る ICT

### 小型端末やタブレット活用

登下校中の児童生徒の安全を守るうと、各自自治体がICT（情報通信技術）の活用を本格化させている。

佐賀市では小型端末を児童に配り、通学路での位置情報を記録して居場所を把握する取り組みを進めている。9月までに市内全35校区で導入が完了した。端末は、見守りサービスを開発する企業「otta（オッタ）」（福岡市）が開発した。端末を持った児童が、コンビニや郵便局など専用ルーターが設置された「見守りスポット」を通過すると、同社のサーバーに位置情報

報が記録される。児童が行方不明になるなどした際は、警察が行動履歴を追跡できる。

11月3日時点で4930人が利用し、見守りスポットは565か所に上る。位置情報はスマートフォン専用のアプリをダウンロードした人とすれ違っても記録され、地域で児童を見守ることができ、ダウンロードした人に、すれ違った子どもの情報に分かることはないという。市の担当者は「アプリの導入を推進し、子どもたちの『足跡』を数多く残せるよう努めたい」と話す。

山口県教育委員会は2024年度、小中学生がタブレット端末を使い、危険箇所や不審者情報を専用のクラウドサービス上の地図に登録できる仕組みを構築した。授業などで共有しており、27年度末までに全公立小中学校での活用を予定している。

県教委は一般公開も目指している。教職員からは「地域の見守り活動への活用が期待できる」との声が上がっている。



インタビューの動画はQRコードを読み込んでください

「#子育て処方せん」へのご意見をお寄せください。社会部のメール（s-syakal@yomiuri.com）へお願いします。